

学習者のエンパワメントにつながる教授法一

○坂倉 裕子 丹羽 あおい

(コミュニケーションハウス)

目的

前回に引き続き、「子育てが楽になる・親を楽しむ子育て」をキーワードにした親・保育者のエンパワメントのためのコミュニケーション学習プログラムの開発と実践を報告する。今回は、学習者のエンパワメントにつながる教授法一親や保育者の学習環境を「どう」構成するか一に焦点を当てて研究を行った。

方法

従来の教育や研修は、専門家による講義やトレーニングが主流であった。一方、近年の子育て広場などでは、しつけなどのテーマでファシリテーターが母親たちの自由な意見交換を促し、参加者同士が体験を分かち合い、エンパワメントを図っている。

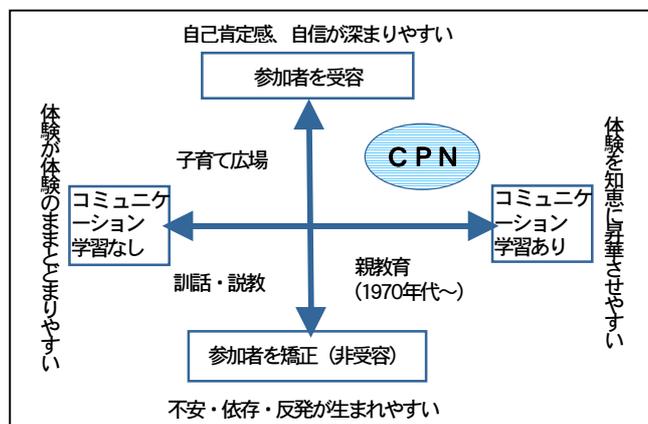


図1 CPN の位置付け

私たちは、参加者が自分の体験をコミュニケーションの知恵に昇華させながら、自己肯定感と自信を深めることを目標に、インストラクションとファシリテーションの長所を兼ね備えた研修方法を研究し、コミュニケーションハウスの主催の親向け研修、子育て支援者向け研修、地方公共団体より委託した保育士研修、PTA指導者研修、パパママ教室、幼稚園・保育園より委託した母親教室、現職研修等において実践してき

た。研修のポイントは以下の5点である。

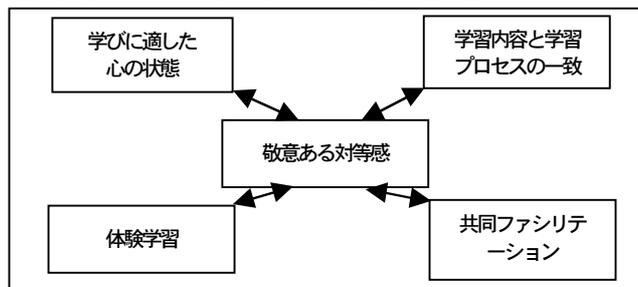


図2 教授法のポイント

1. 参加者と講師の間に敬意ある対等な関係を作る

CPNの講師は、プログラムという道しるべをたどって参加者とともに歩むもの、その場、そのときの発見をともに喜び、学びあうものである。馴れ合いではなくお互いに敬意ある対等な関係を講座を通して結ぶことが、参加者の緊張をほぐし、依存や抵抗を減らして自信に結びついていく。このため、環境作りから内容構成、言葉かけに至るまで「敬意ある対等な関係を作るものか？」を指針にした。

2. 学びに適した心の状態を作る

2-1) リラックスする心理的・実際的環境づくり

講師と参加者、参加者同士の緊張をほぐし、学習効果を高めるために、第一項の「敬意ある対等な関係」を念頭におき、名札の用意、席の配置、休憩の頻度（50分集中して10分休憩）、リフレッシュメントの用意、出会いのワークの実施、リラクゼーションワークの実施など、リラックスできる環境作りを行った。

2-2) 学習内容提供方法の工夫

人間の情報入手能力には大きく分けて聴覚・視覚・運動の3つがあり、人によってどの能力を主に使うかのバランスが異なる。（ローズ&ゴル,1992）講義という学習形態は聴覚能力主体の学習者にとっては良い学習環境だが、視覚能力主体、運動能力主体の学習者に

としては困難な学習環境と言える。

より多くの参加者の記憶に残り、活用されやすいよう、講義に加えてパワーポイントによる視覚資料の活用、ワーク、ロールプレイでの体験を組み合わせる学習内容を構成した。

3. 学習内容と学習プロセスを一致させる

従来のコミュニケーション教育の中で、参加者にロールプレイをさせながら講師が「受容が足りない」、「こんな風に言うと子どもは心を閉ざす」と参加者への非受容を伝え、不安と依存が高まる方向に傾く場面が見られることがあった。

「子どもに共感し受容する」という学習内容を、親や保育士に「あなた方は共感や受容が未熟だ」と非受容の言葉や態度で伝えるとき、学習内容と学習プロセスは乖離している。みずからが受容されなかった親が、家に帰って子どもを受容するのは難しい。それによりさらに自分を責めるという悪循環を防止するために、私たちは、提供する学習内容と学習プロセスを一致させるよう、表現方法に工夫をこらした。それによりおのずと、第一項の「敬意ある対等な関係」が実現してきた。

4. ワークやロールプレイを通して、自らの体験を掘り起こす体験学習

中村(2003)によって、学習スタイルと対人関係能力効果の研究が行われ、大学生において「体験学習」を受講した群は、「講義」による心理学を受講した群に比べて対人関係能力が有意に高まっていることが実証された。

ここで言う「体験学習」とは、単純にワークやロールプレイを体験しながら学ぶというだけでなく、学習の場での体験をきっかけとして、これまでの自分の生涯における体験・経験を掘り起こし、分かち合うことによって、講師・参加者がともに深い学びを得る学習方法である。

操作的・否定的体験学習を避け、互いの経験を尊重する肯定的体験学習をめざして、今このときの学習プロセスに留意している。

5. 共同ファシリテーションによる心理的環境整備

心理的に十分に配慮された受容的な環境を用意し、研修効果を高めるために、共同ファシリテーション制をとった。

研修内容を短時間で効果的に伝えるプレゼンターと、参加者の緊張を和らげ自由な発言を促進する環境を作るカウンセリング経験の豊富なファシリテーターの2人1組で研修を行った。参加者の未消化感が減少し、万が一、参加者の過去の心的外傷が呼び起こされるような場合にも、対応可能となるように配慮した。

キャタノ(2002)が著した通り、共同ファシリテーションのメリットは、プレゼンターとファシリテーターが実際的にも精神的にも互いにサポートしあえる点にある。受講者にとっては、考え方、タイプの違う二人が、コミュニケーションし問題解決をしていける事例を目の当たりにすることになり、より理解が深まることになる。

結果及び考察

各研修会終了時に、進行の速さ、ロールプレイやワークへの抵抗感、わかりやすさ、自分の自信につながったか、総合評価について5段階評価のアンケートを行った。

その結果、わかりやすさ、総合評価はすべての研修において4以上、自信へのつながりも3.6以上を得た。

傾向として、親を対象にした研修では、ロールプレイやワークに幾分抵抗を感じる人は少なくなかったが、そのような人たちもわかりやすい、自信に繋がったという評価は高かった。

<参考文献>

Colin Rose and Louise Goll 1992. “Accelerate Your Learning” United Kingdom, Accelerated Learning Systems Ltd.

中村和彦 2003. 「体験学習を用いた人間関係論の授業が学習者の対人関係能力に及ぼす効果について—社会的スキル・対人不安などへの効果および学習スタイルと効果との関連—」『アカデミア』(南山大学紀要人文・社会科学編) ,76:103-141.

ジャニス・ウッド・キャタノ 2002. 『親教育プログラムのすすめ方』東京 ひとなる書房